

冠詞・指示・知識

——相互知識のパラドクスと相互行為——

福島 祥行

0. 冠詞とコミュニケーション

たとえばフランス語の定冠詞が指示詞に由来することからも明らかなように、「冠詞」についての研究は「指示」という現象を離れては行かない得ない。だが翻って見るに、「指示」*référence* とは一体何であろうか？ ことばの産出には、「話し手」(=発話者 *énonciateur*) と「聞き手」(=共発話者 *co-énonciateur*) が缺かせない。当然、「指示」とはこの両者の間に生成する現象ということになるが、そこには「理解」という問題が介入する。はたして「理解」*entente* とは何であろうか？ さらに、冠詞の「不定／定」には、「相手の理解状態の探索」という問題も発生する。かくして、問題は、「コミュニケーション」の問題に発展していく。

本小稿では、冠詞研究が必然的にコミュニケーション研究につながる過程を示し、その結果としての指示と理解の問題を、構築主義的相互行為論の立場から論ずる。

1. 冠詞と指示

1-1. 冠詞システム

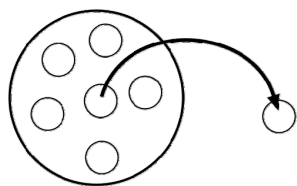
冠詞という文法カテゴリーについての研究は、「不定冠詞／定冠詞」という二分法の上に立ちつつ論ずるのが基本であり¹、その論は、おおむね二つの説に分けられる。すなわち、「未知／既知」説と「部分／全体」説である。たとえば、手元にある『広辞苑』第4版は「部分／全体」説を採っている。

(1) a. 【不定冠詞】(*indefinite article*) 冠詞の一。可算名詞に付けて、その名詞概念によって頭に浮べるものの集合の一部(一個ないし数個)が問題になっていることを示す。

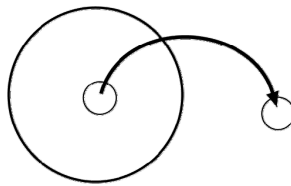
b. 【定冠詞】(*definite article*) 冠詞の一。名詞(単数・複数とも)の前(稀に後)に付して、その名詞概念によって頭に浮かぶ集合を残らず問題にしていることを表す。

これを図式化すれば、(2)のようになる。

(2) a. 不定冠詞



b. 定冠詞



一方、「未知／既知」論にも、さまざまな根拠が存在する。冠詞について3巻本の著作を遺したドイツ語学の泰斗・関口存男は、次のように書く。

(3) a. 不定冠詞の機能は、その次に置かれた名詞の表示する概念が、話者あるいは聴者にとって、何等かの意味において未知と前提されてよろしいことを暗示するにある。(関口 1961 : 12)

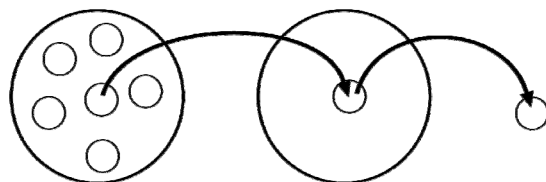
b. 定冠詞の機能は、その次に置かれた名詞の表示する概念が、何等かの意味において既知と前提されてよろしいことを暗示するにある。(関口 1960 : 1)

また、(4)のように論ずるフランス語学の碩学・鷺尾猛の冠詞論も、やはり「未知／既知」論に入れて良いかもしれない。

(4) [...] 浮んだ物の姿をまず不定冠詞で表現し、それにひきつづいて、話題はいま不定冠詞をかぶってあらわれた名詞そのもの(その名詞のあらわす物ではないことをくどいようだが注意する)であることを保証する意味で、不定冠詞の上に更に定冠詞をつけるのだといった。(鷺尾 1960 : 67)

さて、この二つの立場は、福島(1991)においてすでに論じたように、相容れないものではなく、一つの事態の別の局面を強調しているだけにすぎない。それは、(2)を(5)のように書き直すことで明らかになる。

(5) 「部分／未知」→「全体／既知」の過程化



これはつまり、「部分／全体」論に「認識の階梯」を導入することにより、「未知／既知」論と整合するということである。このことは、(6)の表にまとめられる²。

(6)

	認識	集合	情報
不定冠詞	第1段階	部分	未知
定冠詞	第2段階	全体	既知

だが、冠詞が名詞句に付されるものであり、名詞句の認識的在り方を示すものである以上、冠詞のシステムには「裸名詞句」すなわち「無冠詞」を入れるべきである。その場合、冠詞情報を付されていない無冠詞は、不定冠詞の前の段階と看做し得るであろう。

しかしながら、「集合」や「情報」の面から見たとき、無冠詞の特徴はどのようなのであろうか。無冠詞、すなわち名詞句そのものでは、たとえば成句裡の無冠詞名詞句が示すように、謂わば「名詞句性」を備えておらず、単に、当該名詞句の「概念」(notion)のみを提示している。これはつまり、「集合」的には言及以前の状態であり、言表裡に導入されていない(Guillaume 式には現働化 *actualisé* されていない)のであるから、「情報」的には「未知」ということになる。

さて、言語を「相互行為」*interaction* と捉える立場からすると、話し手と聞き手の存在が視野に入れられねばならない。上に見た冠詞のシステムにおいて、「集合」の側面は話し手の認識に関わるものであり、聞き手が直接介入する余地を持たないのにたいし、「情報」の側面は、聞き手の認識が大きな意味を持つてくる。かくして、「相互行為論」*interactionnisme* の立場からは、冠詞を、「情報」すなわち「未知/既知」論から考えることになる。

1-2.冠詞と情報

冠詞と情報の問題について、福島(1995)に論じたポイントを(7)として再掲する。

- (7) a. 「未知」(=不定)とは、当該の指示対象を同定できるだけの情報を話し手のみが有しており、聞き手は有していないということを示す。
- b. 無冠詞名詞句とは、「名詞(=名前 *nom*)のみの形」であり、その指示対象についての情報は、話し手が一方的に管理している。(cf. 大賀・メランベルジェ 1987: 135, 247-252)。

- c. 話し手の有する情報が「冠詞」という形で言語化されているのは不定冠詞と定冠詞であり、無冠詞段階では、言語としての明示的(外示的 *explicite*)情報は存在しない³。

これを表にまとめたものが(8)である⁴。

このように見るならば、冠詞システムとは、話し手-聞き手間で「指示対象を同定できるだけの情報」が共有されてゆく過程をマークするものであると云うことができよう。しかしながら、「指示対象を同定できるだけの情報」とは、具体的にどういうものなのであろうか。

(8)

	話し手側情報	情報の言語化	聞き手側情報
無冠詞	○	×	×
不定冠詞	○	○	×
定冠詞	○	○	○

2. 指示の成立

2-1. 冠詞と指示

次の(9)の不定名詞句 *un roi* において、話し手が専有している「指示対象を同定できるだけの情報」とは、「いちばんめの星に住んでいた王さま」が「どういった王さま」であるかという情報と考えられるかもしれない。

- (9) *La première était habitée par un roi. Le roi siégeait, habillé de pourpre et d'hermine, sur un trône très simple et cependant majestueux.* (*Le Petit Prince*)

しかしながら、続いて使用されている *le roi* という定名詞句の使用が示している「指示対象を同定できるだけの情報」は、「どういった王さま」であるかではなく、第一文において談話裡に導入された「いちばんめの星に住んでいる王さま」以上のものではない。すなわち、(9)における *le roi* の「指示対象」とは、「言語文脈外」に存在する「いちばんめの星の王さま」ではなく、「直前の文章によって会話に導入された *un roi* 」ということになる。這般の消息について、東郷(1999)は、

- (10) たとえば、「昔々あるところに、おじいさんとおばあさんが住んでいました」という発話で談話が始めると、この文に含まれた名詞句「おじいさん」「おばあさん」によって、聞き手の談話モデルのなかに新たな指示対象が導入される。[…]

談話モデル⁵のなかに登録された指示対象は、後続談話で定名詞句や代名詞を用いて照応することができる。

と指摘している⁶。かくして、不定名詞句／定名詞句の機能を、甚だ簡単にまとめるなら、おおむね(11)のようになろう。

(11) a. 不定名詞句は、新しい指示対象を導入する。

b. 定名詞句は、導入済みの指示対象を指す。

要するに、有冠詞名詞句の「指示対象」とは「言語文脈内」に存在するのであり、「言語文脈外」に実存しているのではないのであり⁷、当然「指示対象を同定できるだけの情報」とは、「言語文脈内で提示されている情報」ということになる。

2-2. 定名詞句と同定

かくして、話し手は、聞き手にたいして、ひとたび *un roi* と発話すれば、その後の発話裡では *le roi* と云うことが可能になる。だが、実際の発話では、不定名詞句を言語文脈内的に照応しない定名詞句はけっして珍しくない⁸。たとえば、(12)の3行目における *la maison* と *les enfants* は、「先行する不定名詞句」を持たないにもかかわらず、定名詞句として現れている。

- (12) 1. L: *Ça c'est une amie qui a, de surcroît n'est pas (Sを見て) une vieille dame(笑), (正面を向き) m'a donné ce truc pour coudre les boutons. (Sを見て) Moi j'suis [pas une couturière*
2. S: [Hmm
3. L: *vraiment affirmée, (正面を向き) et je reconnais qu'à la maison en plus je:, quand (Sを見て) les enfants, euh, perdent leurs boutons je leur dis « Tu les couds toi-même parce que: plus tard tu les coudras tout seul, donc c'est pas à moi de les recoudre. » = (Truc)*

このような例において、話し手は、聞き手が「指示対象を同定できるだけの情報」を持っていると、如何にして判断できるのでしょうか？

東郷(1999)(2001a)(2001b)は、Fraurud の名詞の三分類 (Individuals, Functionals, Instances) を援用しつつ、(12)のような例も「聞き手の共有知識領域」にあるデータが「言語文脈領域」にコピーされているため、同定が可能になっていると説明する⁹。つまり、3行目の発話について、聞き手 S は「話し手 L が、ホームレスではなく普通に家に住んでおり、複数の子

供を持っている」ということを知っていて¹⁰、その知識を動員することにより、初出の *la maison* や *les enfants* という「明示的に不定名詞句段階を経ない定名詞句」にも対処できるというわけである¹¹。

たしかにそうかもしれない。だが、そうだとすると、新たな疑問が生ずる。すなわち、話し手は、聞き手にその知識があるということを、如何にして知ったのであろうか？ そしてさらに、話し手は、聞き手が « *maison* » や « *enfant* » ということばを耳にしたとき、それを「家」や「子供」と理解するのであろうと、如何にして知っているのであろうか？ これはつまり「共有知識」にかんする問題であり、それゆえに、冠詞と指示の問題は、「他者の心」の問題へと向かうのである。

3. 知識のありか

3-1. 相互知識のパラドクス

前章で見たように、定冠詞の使用にかんしては、「聞き手の知識」を想定せねばならない場合があった。だが、じつはこのことは、特殊なケースではない。なぜならば、(9)における *roi* のように、先行する談話裡に、明示的に「指示対象」*un roi* が導入され、聞き手がそれを聴き取ったと「考えられやすい」場合であっても、あくまで「考えられやすい」だけであり、聞き手が聴き落したり聴き間違ったりせず *roi* という語を聴き取っているということは、話し手の謂わば「希望的観測」に過ぎないからである。

この問題は、Clark & Marshall (1981)の指摘により、「相互（共有）知識のパラドクス」(*mutual knowledge paradox*)としてよく知られている。これは、たとえば、「ロミオとジュリエットは、互いに、薬をのむと仮死状態になると知っている」というもので、「ロミオ」をA、「ジュリエット」をB、「薬をのむと仮死状態になること」をPとすると、(13)のように表せる。

(13) A と B が P を知っていること

a. A は P を知っている

a'. B は P を知っている

b. A は、B が P を知っていること、を知っている

b'. B は、A が P を知っていること、を知っている

c. A は、B が、A は P を知っていること、を知っていること、を知っている

c'. B は、A が、B は P を知っていること、を知っていること、を

知っている

以下、これは果てしなく続き、無限遡行を生む。そして、このことを問題視する田窪・金水(1996a)(1996b)は、「他者の知識状態にたいする想定」を不要とする「談話管理理論」を提案する。そこでは、発話時に、話し手は、確実に判定できる自己の知識状態(長期記憶内のすでに検証され同化された直接経験情報や、まだ検証されていない一時的情報¹²⁾)にのみ基づくことが主張されている。

この論にたいし批判を加えた東郷(2000)は、(14)において「アノ」を用い得るためには、話し手が、聞き手も当該の海や珊瑚礁を知っていることを知っていること、すなわち「共有知識」を前提にする必要があるとし、田窪・金水の論では、話し手の立場だけで「アノ」を使い得ることになるため、問題があると指摘する。

(14) ほら、去年いっしょに沖縄に行っただろ。あの青い海、あの珊瑚礁……

また、(13)のパラドクスについても、「神の視点」に立つ「決定論的言語観」が招来してしまうのであり、談話は「非決定論的」な「相互行為」であると考え、回避できると論ずる。

このことは大変重要な指摘である。すなわち、ことばのやりとりの場において、「ア・プリアリに決定している」ものではなく、ことばとは、参与者たち(話し手ー聞き手)の「相互行為」によって、「そのつどそのつど」決定されていく「動的」なものと結論できるからである¹³⁾。

3-2. 「他者」の心

しかしながら、その東郷も(15)のように述べ、「他者の心」は「不透明」なものと考えている。

(15) a. 現実には話し手の側からの一方的な想定に基づいて談話を構築する (東郷 2000)

b. われわれは他人の頭のなかを覗くことはできない。聞き手の共有知識とは、話し手の私が「相手はこれくらいは知っているだろう」と想定する内容にすぎない。 (東郷 2000)

この指摘も亦、重要であろう。なぜならば、言語にかかわるすべて、すなわち、「文法」や「単語」といった「話し手ー聞き手に共有されている」ものは、言語の場の参与者たちにとって、互いに「不確定」だということ

になり、たとえば「家で子供たちがボタンをなくした」という発話において、主語や動詞が何であり、テンスはどうであり、「子供たち」の《意味》は何であるか、さらに発話全体は何を《意味》するのかということは、ひとえに「話し手の想定」によって規定されることになるからである。

また東郷(2000)は「相手の共有知識についての査定がまちがっていれば、指示詞はうまく理解されないことがあるが、このような齟齬が生じたときには、すみやかに修復過程 repair が実行される」と述べているが、これはつまり、「聞き手の解釈」は「相互行為の結果」にしか立ち現れないということであろう。たしかにそうかもしれない。だが、もし、談話の進行裡に「齟齬」が生じなければ、「聞き手の解釈」は、話し手にとって、永遠に不可知なものとなってしまふ。たとえば、

(16) A: あの芝居おもしろかったよね……?

B: うん、あの芝居はおもしろかった……

という会話において、両者の「芝居」の指しているものがじつは異なっており、互いに死ぬまでそのことに気づかなかつたとしたら……。

おそらく、こうである。「相互知識のパラドクス」は、知識のありかを、話し手ー聞き手の双方に認めることから生ずる、と。言い換えれば、「知識」は両者の裡、すなわち「個々人の内部」に存在しないということである。では、どこに存在するのか? それは、東郷が正しく主張したように、「相互行為」のなかに他ならない。

4. 構築主義的相互行為論

4-1. 指示対象と相互行為

上で述べたことは、次の二点である。

(17) a. 「指示対象」とは「外界の実在物」ではなく、言語文脈裡に存在する。

b. 「知識」は「個々人内部」には存在せず、「相互行為」のうちに存在する。

(17a)の「言語文脈裡」とは、具体的会話においては、「会話」そのものであろう。だが、Traverso (1999)なども指摘するように、会話の場において発信しているのは話し手だけではなく、聞き手も、視線その他のさまざまなチャンネルを通じて、話し手の発話と同時に非言語的情報を発信しているのであり、「会話」とは「言語的かつ非言語的相互行為」と考えるべきで

ある。とすれば、「指示対象」はそのような「相互行為の場」にこそ存在すると考えられる。そして、そのことは、ただちに(17b)とリンクする。すなわち、文法や語義等の「知識」は、相互行為の参与者個々人が、ア・プリオリに有しているのではなく、「相互行為の結果」、その「相互行為の場」に析出するわけである¹⁴。

かくして、(17)は、次のように書き直し得る。

- (18) ことば(それが語であれ文であれ)の指し示すものは、話し手および聞き手の内部に、それぞれ存在するわけではなく、両者の相互行為のなかに、そのつどそのつど立ち現れる。

「指示対象」は、話し手と聞き手の「内部」に個別に存在するのではなく、相互行為のうちに、両者がアクセス可能なかたちで存在する。また、「共有知識」も同様に、話し手—聞き手が共にアクセス可能な「指示対象」の一種であり、「聞き手の心理についての話し手の想定」といった、「不透明な個人の心」に閉じ込められたものではない。さらにこのことから、先に述べた *la maison* や *les enfants* が「Lの家」や「Lの子供たち」を《意味》するという事態はもちろん、*maison* が「家」を *enfant* が「子供」を《意味》するという、一見、当該言語(この場合はフランス語)の体系における「コード」と化しているように見える事態も、じつは談話の参与者間で、「そのとき、たまたま」成立した一時的なものであることが明らかになる。「コード」とは「事後的に見出された規則」に他ならない^{15,16}。

(16)の「あの芝居」の「指示対象」についても、同じことが指摘できる。たとえ(16)における A、B 両者が「想い浮かべていた芝居」が、現実的には異なっていたとしても、「指示対象」が相互行為の中に存在する以上、両者の会話が「かみあっていれば」、両者の「あの芝居」の「指示対象」は一致しており、コミュニケーションは成立している¹⁷。「聞き手の解釈」が存在しない以上、「話し手にとって不可知」という事態——もちろん、聞き手が「話し手の云いたいこと」にたいして不可知、という事態も——は、理論的にあり得ない。西阪(1997)が主張するように、「他者の心」は透明であり、「想定」は不要なのである。

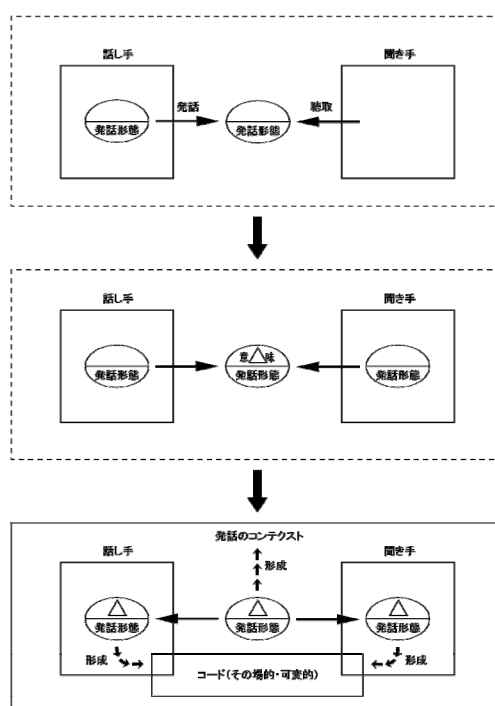
4-2. コミュニケーションの構築主義的成立

《意味》とは、それが用いられたときに、はじめて存在する¹⁸。むろん、《意味》すなわち *signifié* だけではなく、指示対象 *réfèrent* も、さらには

signifiant も、ア・プリアリには存在せず、相互行為の結果、ア・ポステリオリに現れる「社会的産物」である¹⁹。そして、このような立場は「構築主義」constructionisme に他ならないであろう²⁰。この点において、はなはだ雑駁ながら、「コミュニケーション=構築主義的相互行為」と主張することこそ、本稿の主張のひとつであった。もちろん、このことにかんして検討すべきことは山積するが、別稿をもってあたりたい。

最後に、上に述べたことを図式化すれば、次のようになる。

(19) 構築主義的コミュニケーション過程



以上、冠詞という一言語現象の研究が、コミュニケーションの研究につながる道筋を粗描してきた。それは畢竟、ことばの問題をあつかうことは、コミュニケーションの問題にふれることに他ならないということであり、いずれ「人間」の問題に到らざるを得ないということの証左なのである。

【注】

- 1 以下、「不定冠詞」article indéfini を、部分冠詞 article partitif を含む呼称として用い、un / une / des と du / de la については、鷲尾(1960)に倣って、それぞれ「計数的不定冠詞」「計量的不定冠詞」と呼ぶ。
- 2 じつは、「部分」とは「任意の一部」なので当然「特定できず未知である」が、「全体」は選択の余地がないゆえ「定まっており既知である」という説明も可能かもしれない。
- 3 言語化された手懸かり(トリガー)がないため、無冠詞が用いられる状況では、聞

- き手が情報にたどりつくための何らかの支え(すなわち、広義のコンテキスト。ex. 看板、呼格、成句 etc.) が要請される (cf. 福島 1992)。
- 4 福島(1995)の表を一部改めた。
 - 5 東郷(1999)は、「談話とは、話し手と聞き手の間の相互作用により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象 **mental representation**」であり、「談話モデル **discourse model** とは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的表象」と定義している。
 - 6 英語にかんしてではあるが、坂原(1996)にも同様の指摘が見られる。なお、坂原は「談話記憶に新しい要素を導入」「談話資源内の要素を同定」という云い方をしている。
 - 7 無冠詞名詞句の指示対象についても同様の指摘ができると思われる。
 - 8 東郷(1999)の引くところの先行研究によると、初出定名詞句のうち、スウェーデン語において 64%、英語において 34%の定名詞句は先行詞を持たないという。
 - 9 この「談話モデル」メカニズムの詳細にかんしては、東郷(2001b)を参照。
 - 10 このコーパスは、テレビのワイドショー裡の 1 コーナーにおける発話であり、S (司会者) と L (コーナー担当者) は、最低でも、同じ番組のメンバーである程度には親しい仲と考えられる。
 - 11 じつは、この説明においては、「現実に存在する L の家」や「L の子供たち」といった「言語文脈外的指示対象」が暗々裏に想定されている。このことについての説明は、定名詞句は「一次的には言語文脈内の指示対象を照応する」が、「二次的には、言語文脈外的指示対象を、間接的に照応することもある」といったものになろう。
 - 12 田窪・金水の用語では、前者を D-領域(直接経験領域)、後者を I-領域(間接経験領域)と呼ぶ。
 - 13 東郷(2002a)における「名詞述語にも状況項を設定」すべきであるという主張も、この考え方と深く関連していると思われる。
 - 14 さらに云えば、ある語やある発話の《意味》は、相互行為の後、事後的に見出されるわけである。
 - 15 コミュニケーションの「コード・モデル」にたいする批判は、「関連性理論」(Sperber & Wilson 1981)に詳しい。しかしながら、彼らの提示する「推論モデル」も、「話し手知識」「聞き手知識」を個別に設定する点において、筆者の論と立場を異にする。
 - 16 また、ウィトゲンシュタインの「ルール」についての議論も参照されたい(cf. Wittgenstein 1953)。
 - 17 むろん、東郷の指摘したように、会話の進行の結果、両者の「齟齬」が明らかになることがあるかもしれない。だが、それでも、「発話時のコミュニケーション」は成立していたのであり、「コミュニケーションの失敗」とは看做し得ない。
 - 18 もちろん、ウィトゲンシュタインの有名な「とある語の意味とは、ことばにおけるその使用 (Gebrauch) である」(『探究』43) というテーゼも、このことを指しているよう(cf. Wittgenstein 1953)。
 - 19 **signifiant, signifié, référent** という記号の諸要素の社会性にかんしては、福島(印刷中)参照。
 - 20 構築主義にかんしては、上野編(2001)所収の各論を参照。

【参考文献】

- 井元 秀剛 (2001): メンタルスペース理論における定名詞句の指示について、『言語における指示をめぐって』言語文化共同プロジェクト 2000, 大阪大学言語文化学部/大阪大学大学院言語文化研究科: 21-35.
- 上野千鶴子 編 (2001): 『構築主義とは何か』勁草書房.
- 上野 直樹 (1998): 見ることのデザイン——知覚の社会—道具的組織化, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロロジーの想像力』せりか書房: 204-223.
- 上野 直樹・西阪 仰 (2000): 『インタラクション——人工知能と心』大修館書店.
- 大賀 正喜・G. メランベルジェ (1987): 『和文仏訳のサスペンス』白水社.
- 柄谷 行人 (1986): 『探究 I』講談社学術文庫, 講談社, 1992.
- 木村 大治 (2003): 『共在感覚——アフリカの二つの社会における言語的相互行為から』京都大学学術出版会.

- 坂原 茂 (1996): 英語と日本語の名詞句限定表現の対応関係, 『認知科学』3-3, 日本認知科学会: 38-58.
- 関口 存男 (1960): 『冠詞——意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究』第1巻 定冠詞篇, 三修社.
- 関口 存男 (1961): 『冠詞——意味形態的背景より見たるドイツ語冠詞の研究』第2巻 不定冠詞篇, 三修社.
- 田窪 行則・金水 敏 (1996a): 対話と共有知識——談話管理理論の立場から, 『言語』25-1, 大修館書店: 30-39.
- 田窪 行則・金水 敏 (1996b): 複数の心的領域による談話管理, 『認知科学』3-3, 日本認知科学会: 59-74.
- 東郷 雄二 (1999): 談話モデルと指示——談話における指示対象の確立と同定をめぐって, 『京都大学総合人間学部紀要』6: 35-46.
- 東郷 雄二 (2000): 談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア, 『京都大学総合人間学部紀要』7: 27-46.
- 東郷 雄二 (2001a): 定名詞句の指示対象同定のメカニズム, 『フランス語学研究』日本フランス語学会, 35: 1-15.
- 東郷 雄二 (2001b): 定名詞句の「現場指示的用法」について, 『京都大学総合人間学部紀要』8: 1-17.
- 東郷 雄二 (2002a): フランス語の不定名詞句と総称解釈, 『京都大学総合人間学部紀要』9: 1-18.
- 東郷 雄二 (2002b): 不定名詞句の指示と談話モデル, 『談話処理における照応過程の研究』文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書.
- 西阪 仰 (1996): 対話の社会組織, 『言語』25-1, 大修館書店: 40-47.
- 西阪 仰 (1997): 『相互行為分析という視点——文化と心の社会的記述』認識と文化 13, 金子書房.
- 西阪 仰 (1998): 概念分析とエスノメソドロジー——「記憶」の用法, 山田富秋・好井裕明 編『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房: 204-223.
- 西阪 仰 (2001): 『心と行為——エスノメソドロジーの視点』岩波書店.
- 野本 和幸 (1997): 意味はどこにあるのか——現代の論理的意味論マップ, 『言語』26-10, 大修館書店: 30-37.
- 福島 祥行 (1991): 冠詞システムの研究——《動的認識構造》に依る文法現象の統一的解釈(I), 『Lutèce』21, 大阪市立大学フランス文学会: 1-22.
- 福島 祥行 (1992): 《無冠詞》用法の研究——《動的認識構造》に依る文法現象の統一的解釈(II), 『Lutèce』22, 大阪市立大学フランス文学会: 1-19.
- 福島 祥行 (1995): 冠詞・記憶・時間——メモリ・システムと認識構造, 『人文研究』47-2, 大阪市立大学文学部: 19-36.
- 福島 祥行 (1999): 会話分析から見た冠詞と指示対象, 『人文研究』51-7, 大阪市立大学文学部: 23-46.
- 福島 祥行 (2000): 《意味》の本質と生成過程——相互行為論の観点から——, 『人文研究』52-10, 大阪市立大学文学部: 19-36.
- 福島 祥行 (印刷中): 記号・標識・相互行為——構築主義的コミュニケーション研究のこころみ(1) ——『人文研究』55-6, 大阪市立大学大学院文学研究科.
- 三藤 博 (1999): 談話の意味表示, 『談話と文脈』岩波講座言語の科学 7, 岩波書店: 55-91.
- 鷺尾 猛 (1960): 『フランス語 冠詞の話』大学書林.
- CLARK, Herbert H. & MARSHALL, Catherine R. (1981): Definite reference and mutual knowledge, in Aravind K. Joshi, Bonnie L. Webber, & Ivan A. Sag, (eds), *Elements of Discourse Understanding*, Cambridge University Press: 10-63.
- GUILLAUME, Gustave (1919): *Le Problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Nizet / Univ. Laval, 1975.
- GUILLAUME, Gustave (1944): Particularisation et généralisation dans le système des articles français, dans *Langage et science du langage*, Nizet / Univ. Laval,

「冠詞・指示・知識」(福島)

1984: 143-156.

SPERBER, Dan & WILSON, Deirdre (1981) : 『関連性理論——伝達と認知』[内田・中達・宋・田中] 研究社出版, 1993.

TRAVERSO, Véronique (1999) : *L'Analyse des conversations*, coll.128, Nathan.

WITTGENSTEIN, Ludwig (1953) : 『哲学探究』ウイトゲンシュタイン全集 8 [藤本隆志], 大修館書店, 1976.

WITTGENSTEIN, Ludwig (1953) : *Tractatus logico-philosophicus suivi de Investigations philosophiques*, [Pierre KLOSSOWSKI], tel, Gallimard, 1961/1986.

【Corpus】

Truc = Trucs: Bouton et allumette (1991), ビデオ教材 *Télé-débutants* 収録, The University of Iowa.

- 1 以下、「不定冠詞」 *article indéfini* を、部分冠詞 *article partitif* を含む呼称として用い、*un / une / des* と *du / de la* については、鷲尾(1960)に倣って、それぞれ「計数的不定冠詞」「計量的不定冠詞」と呼ぶ。
- 2 じつは、「部分」とは「任意の一部」なので当然「特定できず未知である」が、「全体」は選択の余地がないゆえ「定まってお既知である」という説明も可能かもしれない。
- 3 言語化された手懸かり(トリガー)がないため、無冠詞が用いられる状況では、聞き手が情報にたどりつくための何らかの支え(すなわち、広義のコンテキスト。ex. 看板、呼格、成句 etc.) が要請される (cf. 福島 1992)。
- 4 福島(1995)の表を一部改めた。
- 5 東郷(1999)は、「談話とは、話し手と聞き手の間の相互作用により、時系列に沿って、局所的に構築される、心的表象 *mental representation*」であり、「談話モデル *discourse model* とは、話し手と聞き手の両方の側に、談話の進行に応じて構築される心的表象」と定義している。
- 6 英語にかんしてではあるが、坂原(1996)にも同様の指摘が見られる。なお、坂原は「談話記憶に新しい要素を導入」「談話資源内の要素を同定」という云い方をしている。
- 7 無冠詞名詞句の指示対象についても同様の指摘ができると思われる。
- 8 東郷(1999)の引くところの先行研究によると、初出定名詞句のうち、スウェーデン語において 64%、英語において 34%の定名詞句は先行詞を持たないという。
- 9 この「談話モデル」メカニズムの詳細にかんしては、東郷(2001b)を参照。
- 10 このコーパスは、テレビのワイドショー裡の 1 コーナーにおける発話であり、S(司会者)と L(コーナー担当者)は、最低でも、同じ番組のメンバーである程度には親しい仲と考えられる。
- 11 じつは、この説明においては、「現実に存在する L の家」や「L の子供たち」といった「言語文脈外的指示対象」が暗々裏に想定されている。このことについての説明は、定名詞句は「一次的には言語文脈内の指示対象を照応する」が、「二次的には、言語文脈外的指示対象を、間接的に照応することもある」といったものになるう。
- 12 田窪・金水の用語では、前者を D-領域(直接経験領域)、後者を I-領域(間接経験領域)と呼ぶ。
- 13 東郷(2002a)における「名詞述語にも状況項を設定」すべきであるという主張も、この考え方と深く関連していると思われる。
- 14 さらに云えば、ある語やある発話の《意味》は、相互行為の後、^{ア・ポストリオリ}事後的に見出されるわけである。
- 15 コミュニケーションの「コード・モデル」にたいする批判は、「関連性理論」(Sperber & Wilson (1981)) に詳しい。しかしながら、彼らの提示する「推論モデル」も、「話し手知識」「聞き手知識」を個別に設定する点において、筆者の論と立場を異にする。
- 16 また、ウィトゲンシュタインの「ルール」についての議論も参照されたい(cf. Wittgenstein 1953)。
- 17 むろん、東郷の指摘したように、会話の進行の結果、両者の「齟齬」が明らかになることがあるかもしれない。だが、それでも、「発話時のコミュニケーション」は成立していたのであり、「コミュニケーションの失敗」とは看做し得ない。
- 18 もちろん、ウィトゲンシュタインの有名な「とある語の意味とは、ことばにおけるその使用 (*Gebrauch*) である」(『探究』43) というテーゼも、このことを指しているよう(cf. Wittgenstein 1953)。
- 19 *signifiant*, *signifié*, *réfèrent* という記号の諸要素の社会性にかんしては、福島(印刷中)参照。
- 20 構築主義にかんしては、上野編(2001)所収の各論を参照。